

令和 6 年 5 月 2 日現在

機関番号：16102

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K13076

研究課題名（和文）上級日本語学習者のスピーチスタイルに対する認識とその変容過程の調査研究

研究課題名（英文）Research on advanced Japanese language learners' awareness of speech style and its transformation process

研究代表者

岡崎 渉（OKAZAKI, Wataru）

鳴門教育大学・大学院学校教育研究科・准教授

研究者番号：90791070

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、新規で来日する日本語学習者（留学生）を対象に、スタイル（丁寧体・普通体など）の認識と、日本滞在に伴うその変容を調査する計画であった。だが、研究開始年度である2020年度に新型コロナウイルスの蔓延が始まり、調査対象者としていた留学生が来日できない状況が続いたため、研究を計画通りに進めることができなかった。そこで、コロナ以前から来日していた留学生を対象に、スタイルの認識を調べるテストを作成、実施した。また、日本語母語話者を対象にスタイルの使用実態についての研究を進めた。さらに、研究期間を延長することで、新規来日した少数の留学生を対象に、スタイルの認識の変容を調べる事例研究を実施した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は日本語学習者のスタイル（丁寧体／普通体など）に対する認識を調査したものである。日本語教育において、日本語習得に不可欠であるスタイルの使い分けを適切に指導するために、学習者はスタイルの社会的意味をどう理解しているのか、どのような点に困難を覚えるのかといったことを把握する必要がある。本研究では、スタイルの認識を調べるテストや学習者への縦断調査を実施することで、その認識の一端を示すことができた。

研究成果の概要（英文）：This study was designed to investigate Japanese language learners (international students) newly coming to Japan to investigate their perceptions of speech styles (polite / normal form, etc.) and their transfer during stay in Japan. However, the coronavirus pandemic began in 2020, the year in which the research began, and the international students who were targeted for the study were unable to come to Japan, hence the research could not proceed as planned. Therefore, we created and conducted a test to assess style perception for international students who had been to Japan before the coronavirus. We also conducted research on the actual usage of styles among native Japanese speakers. Furthermore, by extending the research period, we conducted a case study to examine changes in style perception among a small number of international students who had recently arrived in Japan.

研究分野：日本語教育学，社会言語学

キーワード：日本語学習者 スピーチスタイル スタイルシフト 非デスマス形 インフォーマルスタイル インパ  
ーソナルスタイル 気づき

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

### 1. 研究開始当初の背景

日本語話者にとって、スピーチスタイル(丁寧体・普通体等)を適切に運用することは、円滑にコミュニケーションをとり、良好な人間関係を形成していく上で必要不可欠である。日本語学習者用の教科書では、丁寧体はフォーマルなスタイル、普通体はカジュアルなスタイルであり、相手や場面により一方を選ぶと説明される。だが、実際のところスタイルは、より多くの要因が複合的に関わっており、使いこなすことは難しく、国内の上級学習者であっても、不自然、不適切な使い方の見られることが報告されている。

スタイルをどう用いるかは学習者の自由だが、スタイルの意味や印象に対する認識が母語話者と食い違っていた場合、望む人間関係が築きにくかったり、意図せず悪印象を与えたりするおそれがある。スタイルは教室指導だけで理解するには限界があることも報告されており、学習者の自律学習能力を高める指導法や教材の開発が求められる。そのためにはまず、学習者がスタイルに対しどのような認識を抱いているのかを把握しておく必要がある。だが、多くの研究はスタイルの運用面には着目するものの、認識面の研究は不足している。具体的には、日本で生活する学習者は、どのような経験を通してスタイルへの気づきが起こるのか、気づきが起こったスタイルはどのように理解されるのか、スタイルの中間言語知識とも言える認識はどのような変容過程をたどるのか、といった点である。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、上級日本語学習者のスピーチスタイルに対する認識の変容と、それに関わる社会的要因を明らかにし、認識の変容過程の構造モデルを構築することである。学習者のスタイルに対する認識面に焦点を当てた研究はいくつかなされているが、本研究の独自性は、同時期に来日した留学生を対象に、同種の社会的イベントへの参加を通して、スタイルに対する認識の変容を、時系列に沿って学習者間で比較検討する点にある。本研究の成果により指導者は、学習者がスタイルをどのように認識し得るかを想定しやすくなり、その認識を踏まえた指導や課外活動の設定が可能になる。さらには、そのような指導実践を重ねることで、スタイルの自律学習能力を高める指導法や教材の開発へと展開することができる。

### 3. 研究の方法

研究期間の1年目に来日する留学生を対象に1年間の縦断調査を行い、2年目に得られたデータを分析する。調査対象者は、中上級以上の日本語学習者である、中国、台湾、韓国、タイ、ベトナム、モンゴル等の大学から交換留学で来日する外国人留学生である。留学生には、来日直後と帰国直前に、スタイルの認識を測るための聴解テストと質問紙調査を行い、留学期間中は5回程のインタビューを行い、その認識の変容を記録する。これらの結果を複線径路・等至性モデル(TEM)により分析することで、スタイルに対する認識の変容過程、および認識の変容に影響を与えた社会的要因を検討する。

### 4. 研究成果

本研究を開始した2020年4月は、新型コロナウイルス感染症の世界的な流行が始まった頃であり、当初調査対象者として想定していた、新規で来日する予定の留学生が来日できなくなった。そのためまずは、本科研の開始以前から取り組んでいた、スタイルの認識を測るためのテストの作成・検証にとりかかった。検証は、新型コロナウイルス感染症流行以前に来日しており、滞日期間も半年以内と短い留学生を対象に実施した。当初は聴解テストと質問紙調査を準備する予定だったが、質問紙調査は実施せず、聴解で用いる音声をそのままテキスト化した読解テストを行うことにした。調査対象者は日本語学習者16名であり、多くは中国語を母語とする中上級以上の学習者であった。比較のために母語話者にも同様のテストを、読解テストのみ行った。テストの内容は、非母語話者3人のアルバイト採用面接での会話を聴き/読み、採用に値する人物を1人選び、その理由を記述してもらうものであった。その結果、学習者、母語話者ともにもっとも多くの者が選んだのは、丁寧さに欠ける点以外は採用条件を満たしている人物であった。この人物の話す日本語に対し、学習者には肯定的評価が多かったが、母語話者には否定的評価も見られた。また、たどたどしいが丁寧に話す人物に対し、学習者には否定的評価が、母語話者には肯定的評価が多かった。これらの結果から、学習者は丁寧さを表す表現形式の知識はあっても、母語話者ほどは重視していないことが示唆された。だが、調査は探索的に行ったこともあり、調査対象者の十分な統制がなされておらず、結果を一般化することはできない。また、方法の妥当性についても検討の余地がある。

渡航規制が緩和され始め、新規の留学生が来日できるようになってから、対象者を確保し、縦断調査を行った。新規で来日した中国人上級学習者4名を対象に、日本での数か月間の生活を通して、スタイルに対する気づきを逐一記録してもらった。先行研究では主な手法としてインタビューが用いられているが、インタビューだけでは記憶に残っていない出来事も多いと思われるため、なるべく学習者の経験を取りこぼさないようにするため、協力者にはスタイルの関わる出

来事や気づきが起こったときに、随時オンラインで共有したシートに記録を付けてもらうこととした。また、当初は得られたテキストデータを TEM により分析することとしていたが、学習者の来日時期や所属を揃えることができなかったことや、時系列によって見られるパターンが特に見いだせなかったことから、記録の時期を問わず、学習者が記録した内容をそのタイプによって分類することにした。4 か月から半年間にわたる調査の結果、先行研究の結果と同様に、学習者はさまざまなコンテキストにおけるコミュニケーションを通して、スタイルについて自分が抱いていた認識と、母語話者による実際の使用との間のギャップに気づき、自分なりにこのギャップを埋めようと理解を図っていることが示された。また、学習者がスタイルの認識を深められるかどうかは、日常生活でどれだけ多様な人と多様な関わりをもつかに大きく左右されることが示唆された。しかしながら、この研究は事例研究であるためサンプルが少ない。今後さらに同様のデータを収集し、学習者のスタイルに対する認識とその変容について、一般化および理論化を図っていく必要がある。

上記の研究の他に、当初計画していたものではないが、日本語母語話者のスタイルに対しても新たな知見が見出された。デスマス形での会話において、ときおり非デスマス形へのスタイルシフトが起こるが、このシフトについては従来、心理的距離の短縮などの情意的機能の面から説明されてきた。一方で、情意的機能を果たさない非デスマス形も多く用いられるのはなぜなのか、十分な説明はなされていなかった。そこで、デスマス形基調の雑談で用いられる非デスマス形の聞き手目当て性の弱さに着目し、これにより非デスマス形がどのような談話機能を果たしているのかを分析した。データには、11 組の初対面二者間による雑談計 290 分の音声データおよびその文字化資料を用いた。分析の結果、聞き手目当て性の弱い非デスマス形は、受け手の保有する情報に関する発話で用いられることにより、極力次のターンで受け手が何を言うべきかを制約せず、談話展開に非主導的に関与する機能を果たしていることがわかった。

当初の目的に照らすと、計画していた通りの調査は十分に遂行できず、学習者のスタイルに対する認識の変容についての構造モデル構築にまでは至らなかった。しかしながら、当初計画していた時系列に沿った変容過程を捉えるという点については、学習者のスタイルへの捉え方に個人差が大きいと感じられたため、妥当な方法なのかどうかさらなる検討を要する。しかしながら、個人差は大きくても学習者間での共通性も確かに見出されたため、本科研の成果をふまえ、今後知見の一般化および理論化を目指すことで、日本語教育現場における指導実践への接合を試みる意義は十分にあると考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 岡崎 渉	4. 巻 39
2. 論文標題 日本語学習者はスピーチスタイルをどう認識しているか：日本滞在にともなう認識の変化についての事例研究	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 鳴門教育大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 194 ~ 205
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24727/0002000364	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 岡崎 渉	4. 巻 44
2. 論文標題 デスマス形会話における非デスマス形の談話機能	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 ことば	6. 最初と最後の頁 39 ~ 56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20741/kotoba.44.0_39	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 岡崎 渉、濱田 典子	4. 巻 36
2. 論文標題 日本語学習者によるスピーチスタイルの丁寧さに対する認識 - 面接会話を材料とした聴解・読解テストによる検討 -	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 兵庫教育大学学校教育学研究	6. 最初と最後の頁 83 ~ 91
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15117/0002000119	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------